





芳川俊雄 関

上

14
2689
4



秋あじ

おきぬ

花

芳川 俊雄 図

仇 夢 二 編

園 李 勘 造 繪

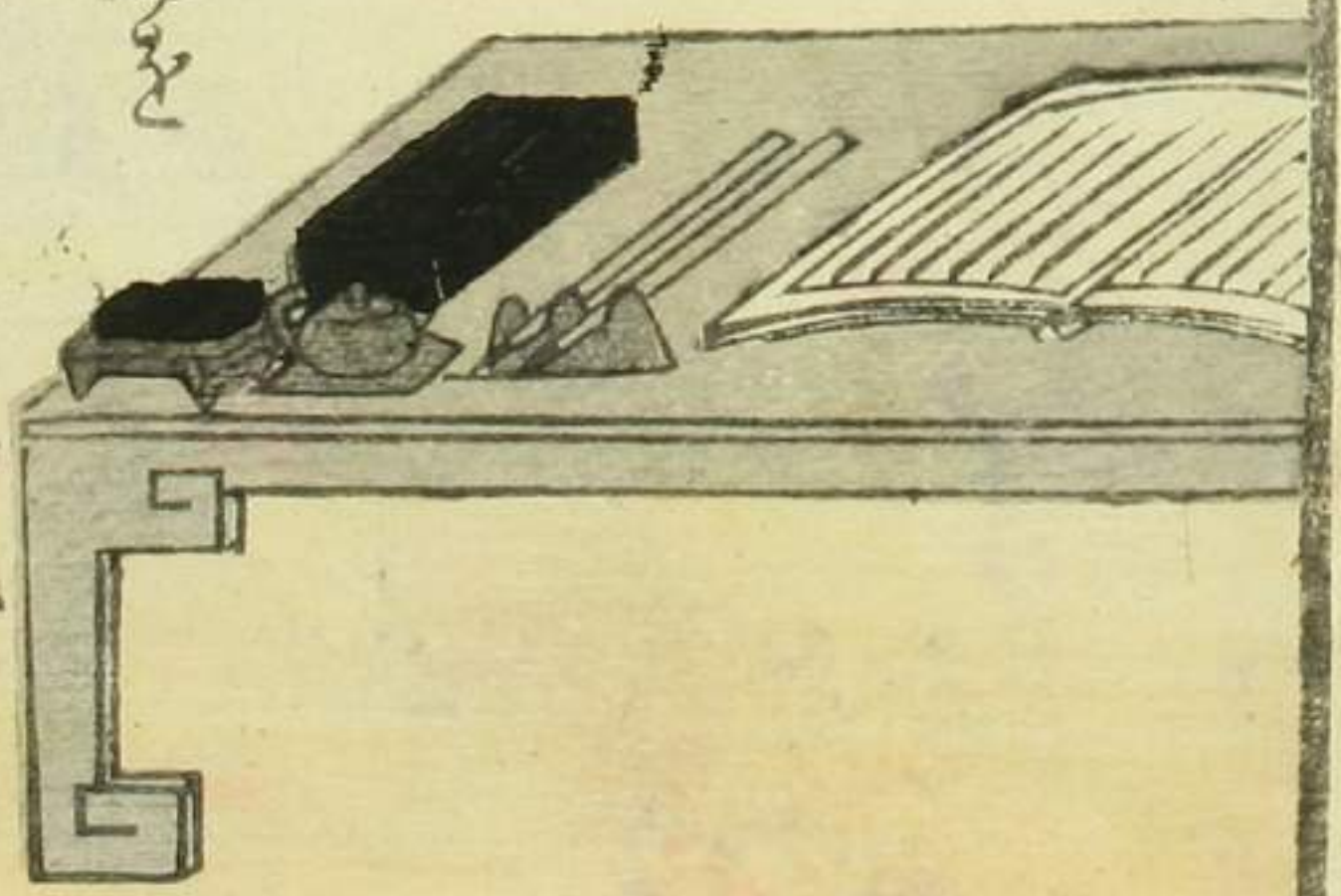
金 松 堂 粹



子 畫 中 西 畫



花見小袖此色す一疾うろひく今ぞ
此も思ひ宿る涙をんおまじれ花に
あつて衣のやれり一駈をよせよと
いされぬ遊をまゝすお禮もそぐじし
おな一おれ面をさゝ葉ちかむたよし
川うし乃は附茶を便してぬく初篇を
後うりに使保も後をよの傳一ありやまゝ持ら
り梅をつぎあやぐひまゝれを之のおまへ仕事に
まゝポツとと流ぐう出



明治十一年七月ら渡

星本島造題



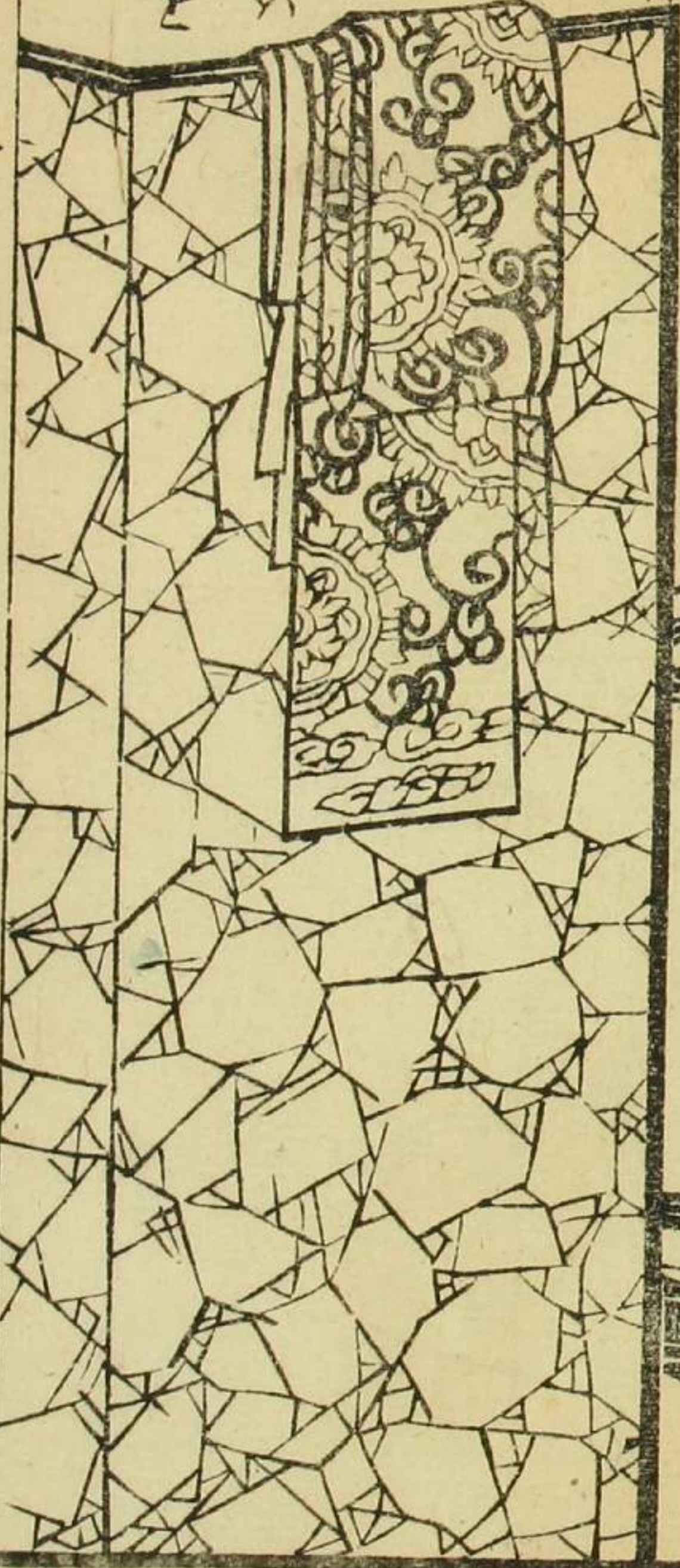


夜嵐二ノ上



夜嵐二ノ上

撥も角太郎思ふもあぬが相手に
 夜の更るまで酒をのみ酔ふれり其
 打卧しまた起もせぬ其翌朝宅に
 いと慌てて取次をち八重さあめ
 とて入るあいでるこれしのもろ
 常事とて思ふれぬ
 下されとのみ成
 聞ぐる角太郎
 昨夜の酒はまだ醒め
 是にお八重が事を
 こゝろ早く



帰つてこれらの事あると兎や角な
 一と清々と宅へ戻れいひい違ひ
 庭の切戸も破れあり曲者入し様子



猿若町の俳優
 嵐璃鶴

送りの者
 源井伊三郎

お八重がわかれの殊の
 訝と夜半は何処へ行
 べきを扱ひ此身がまき
 ぬの許へ通路をひきまき
 恨み小思ひ使ひたる
 身はいとまぢな胸の
 せうこそ若ひうと
 悪い覚悟を志せぬ
 う何れもせよ不思議
 七とお八重の臥床を
 調へてあつたに
 落たる冬の切
 端これいと取あ



△其様の事のあるに様子
 ありけれど現在男の此手
 紙の心せく
 取
 落せ
 小相
 違ふ

げよく見れば
 男の手跡で始りたるけ
 れど此程申し
 あつた通う今宵
 こそ首尾とまのれまじ
 合つたか誌で
 あまは申せし通うるれが
 必らずとも人に曉られぬ様お支
 度あるれよまづの用事のみ
 取のそはありしとて筆のこめても
 消らぬ此道なる
 りこのいふもの
 お八重に限つて△



ア七人の子
 ありとる古人のひール今更
 に思ひ溜きぬるも其を伴出せ
 男の誰を外ふ迹うせし者にて
 一入るるれと折々出入
 下
 水
 次
 勇
 の
 郎のふ真意いやく
 打ど不意氣なる男お八重は常にのやぐり
 あれがよもや彼らありぬ誰であらうと
 手跡を眺め鬼とまかると思察にあぐみ△

ぬたじが元より心廣き性なれ
 深く胸を痛め終る面白
 かく膝下女たのひつひ迎ひ酒を
 湯豆腐は度々をめぐりて獨酌の呀
 隣のをぬくお八重が家出の見舞こそ
 お小夜を使ひよせ座敷へ通へ始終を
 語り証據の多を見せけるお小夜は撲と
 手を拍て是を分る此中々度を見つけた
 小意氣なる男と門辺にてお八重さんか
 ひもくを私
 やも出入



芳
 石町の
 松坂屋の
 様子を探ら
 んと思ひ暮
 程遠り
 らぬ本
 八重の
 事だ
 心み
 りしごあ
 本宅へ用事の
 本町の
 師走る本町の
 芳は去年の



木植
 の植
 木屋

思ひのちど其場を
 らの早速の好悪それと知ら
 終る角太郎の其男の様子
 顔容もい成尋つありあか
 猪口でお小夜さへ互
 酒を酌うの浮世
 本道は角太郎斬首の程の
 大き心で慰めらるる愛ぬ



の内へ鬼
 や角と
 行
 過て一夜
 越し暇
 ありたは近野へ
 出うけ様子を聞
 松坂屋の主人
 弥兵衛の大病
 つる内損の病残
 起し去年の十月
 此世を去りお八重
 の母二度まで



夫の
 先立れ
 一人の
 娘の
 八重
 未だ
 行衛が
 此世の
 斐色と
 の飾を
 二人の
 残と
 が家出

深く契り
 事成押
 かし免
 玉の明日
 めお伴
 云と聞
 の夢を
 故馬を
 て弥兵
 始末を
 か八重
 をせし
 らずか

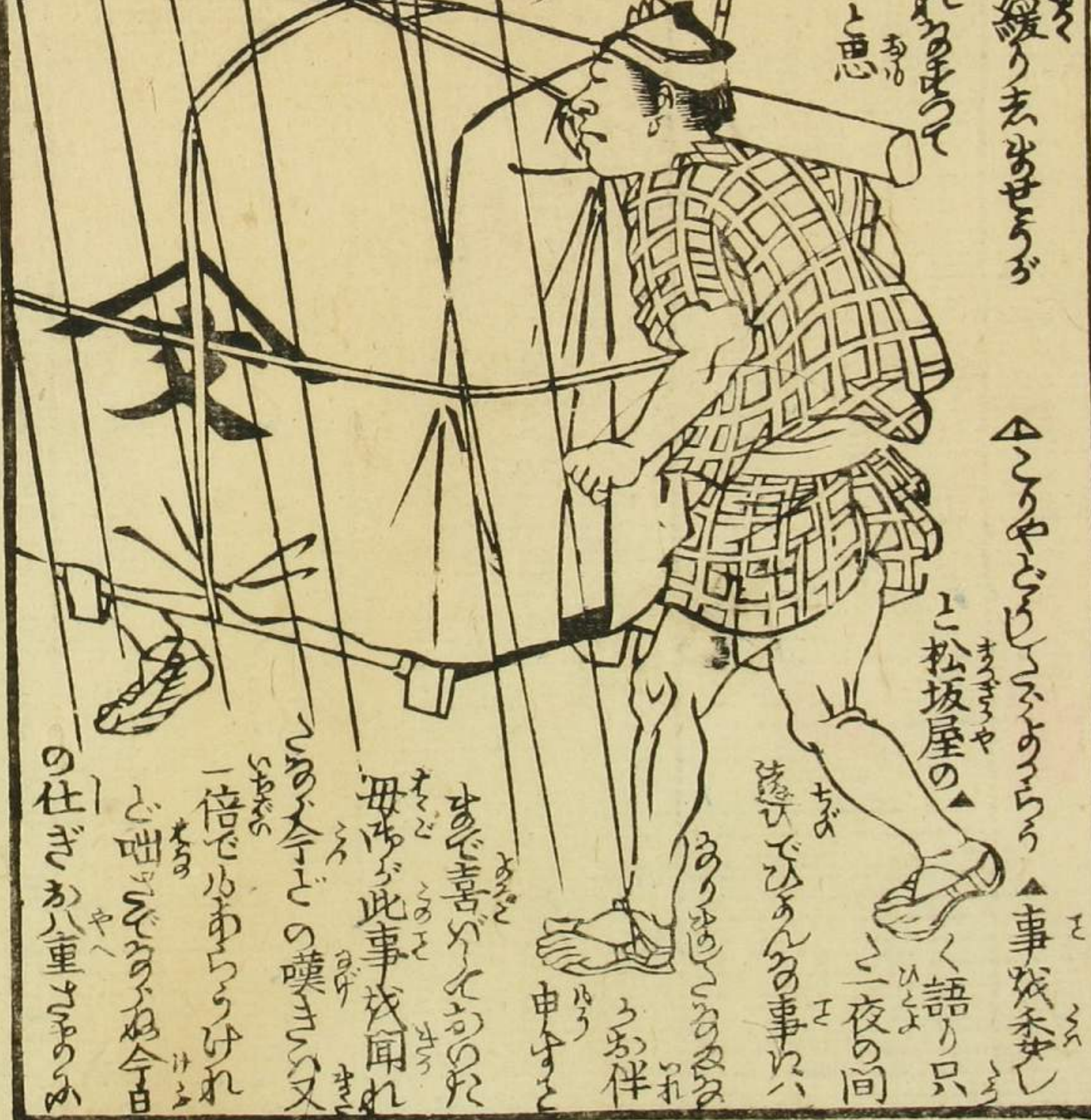


の當日
 念佛三
 店の事
 せし
 出入屋
 るりと
 か芳が
 母い大
 てくれ
 家の不
 老の癖
 お芳い

仕合せ
 屋の
 話め
 私
 わた
 の姪
 親切
 下
 お八重

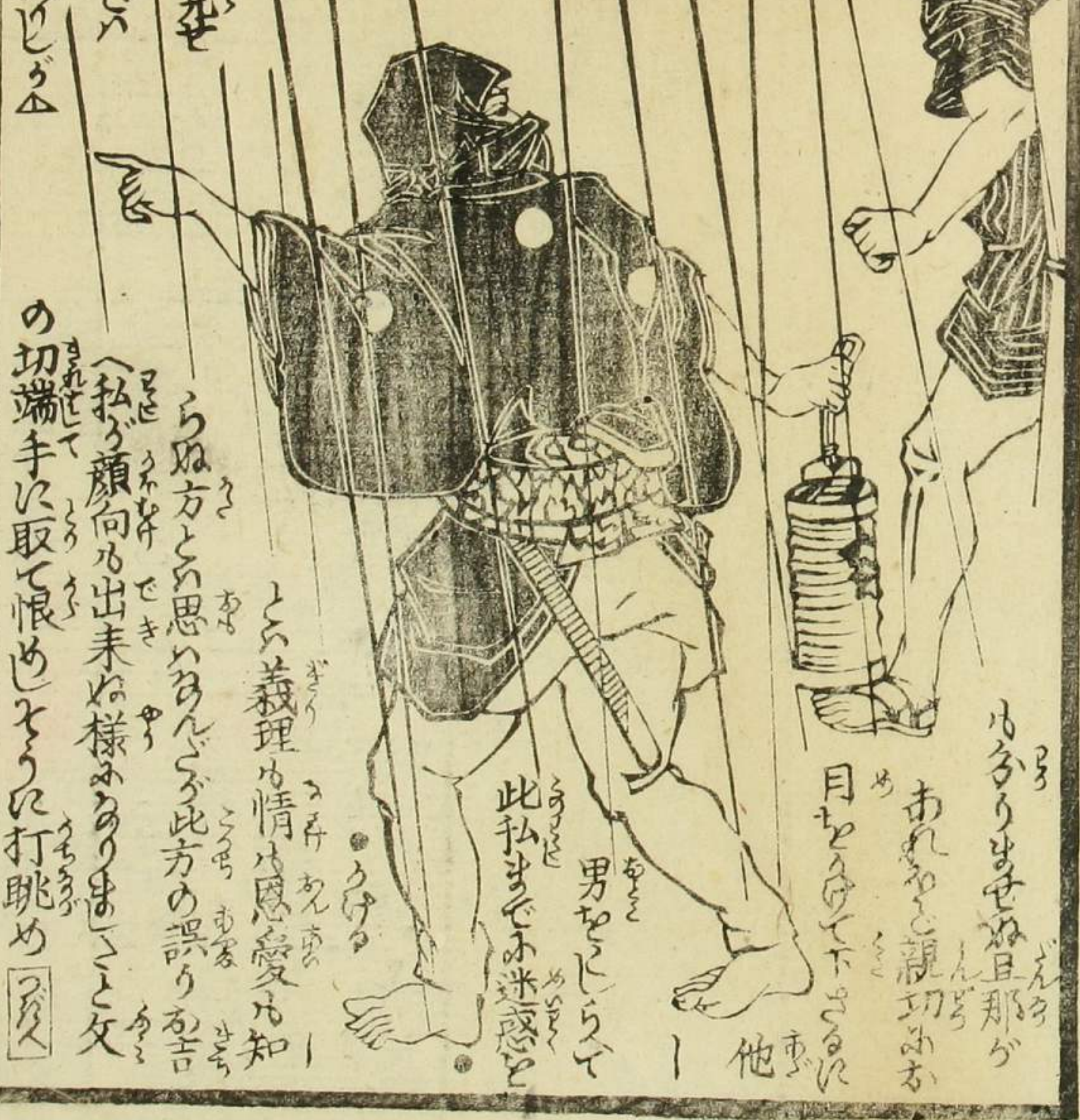
「さうさう香さんのおれは緩りまはせまうが
少しも早うも八重があらぬまはせまうが
下されこの道の理死にたりと思

ひし我
子が息災でぬると申す
一日早くあらぬ母の胸
を察しおち芳の明日にぬあつ
れ申すと辞せつひ先
本町帰らば其翌日の
廿日正月家例の儀式
あるあらぬ出ぬけか
て廿日の朝もたれ急
いで小梅の別荘



▲事残未だし
▲松坂屋の
▲語り只
▲一夜の間
▲はびびる事ハ
▲申す
▲母が此事故聞れ
▲今この嘆きハ
▲一倍もあらうけれ
▲と咄さるる今自
▲の仕ぎ八重と申す

未し時角
太い隣あるお小
夜を送つて門口
み停立ぬか
お芳を見
おの早く来れ
座敷通しお芳が述る
年首の詞の終らぬ
急度とこころは是々あり
昨夜お八重の逃亡せ
始終我語つて証拠の文を見せ
けるおお芳の呆れて暫のあひ
物残ぬる涙ぬれぬたじろ



もろりせぬ且那が
あれやと親功お
目とみ下る
他
男をしらて
此私まよみ迷惑
と義理も情も恩愛も知
らぬ方と思はぬんが此方の誤りも吉
私顔向も出来ぬ様あるの事こと父
の切端手に取て恨めしうに打眺め

つれは是を証拠に松坂屋へ昨夜の始末を咄す外に仕様も多に多し暇を告げてお芳り又も本町へこそ帰り

ぬの思ひのせむに謀りあせてお八重を除きしうら此身の願ハ八重のあつた甘くゆり遂に玄達お小夜と下部の甚八までへ夫々褒養の金と手へは是より先へ角太郎と夫婦はるらん緒口を自身に解り何と申すまで結びし屋敷の縁を切て自決にる事いお小夜



屋敷の首尾を指しと他と事ある頼むを勇治の容易く引受て幸以角太郎

さうで調

ふくもあざれ斯の時の玄達と思へど彼の家業の都合で此頃牛込の葉店轉宅直て路も隔り其後一度も来らひばお小夜の氣成ぬみあれは是のと案する内考へ付ん角太の甚敵にてちよとく出入る本町の割下水に住む幕府のお坊主三崎潤悦の二男ある勇治郎といふ若者



あれは此頃角太と共にあさねの寮より音信を幸ひるゝと或日の事あさねの勇治茂二回招ぎ事の大畧打明てお小夜と共に左右角太の方と



角拙者がまた様に取計
 らへも西入ると必らず心配
 おそへす事と事とをげある
 挨拶に不入いとも頼り思へ
 へ尚も細々と手は苦哉
 語らひ此日酒を馳走の

計らひ只此事の兄ゆふ云出
 うだん筋のれが
 貴口
 心からする
 ぎいある
 丹を飾
 つて説け
 る元来
 兄思ひの竹二
 郎のれは委細
 を兼知直
 に親類人相
 談せは大名の妾を妻に迎へるこ
 い願ふては多る仕合せありと
 何れも悦ぶのさるれが



懇意であれ彼吹込み竹
 次々角太へ勧めさせる元々
 り貴娘と深き中角太の二
 方多く兼知せん屋敷の方へね
 ては流汰のありては老お聞
 びみあるのの必定免ふ

甲と厚く勇治をよて色け頼茂
 受て勇治郎の角太の本宅なる本町へ
 赴き竹二郎面會
 ちきぬの身の上を委
 しく語り兼て角
 太と割る中
 るれは其内
 証若小屋
 敷知れ時
 る面倒
 去早く夫
 婦のれ方があるべし
 屋敷の方へ是々お批者ふたふ
 君ら
 親
 類
 相
 談
 て
 兄
 弟
 お
 勸
 め
 元々
 兄
 弟
 の
 望
 む
 所

永島孟齋画



一途お兄の仕合せと竹二の勧めを幸ひみ角太の
直に承知せし此由勇治傳へて去勇治直に雀の屋敷赴き
掛の役人面會しておきぬの願申し
あけおはし湯浴のありる哉
せちあける

芳川俊雄閱

岡本勘造綴

朝鮮 大色代二十五錢
官 牛肉丸
名法 中色代十二錢五厘
小包代五錢三厘五毛

たんせきの茶
官 天恭丸
錫入一包代五錢二厘五毛

此茶は男女、老若、小兒、皆宜の良薬なり。一
杯一ひぬとす。その味のよき、香りの芳しき、
たゞ持茶に用ひるのみならず、病後、
上とせり。一、あんきやまの、
おまの、おまの、おまの、
おまの、おまの、おまの、
おまの、おまの、おまの、

此天恭丸之效、引一たんせきのせん
せき、〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、
〇、〇、〇、〇、

人文 地本 錦繪 問屋

出版御届明治十一年六月十八日 守六太區小區深川富岡門前町六十五番地
編輯人 岡本勘造
茅天區十三小區横山町三丁目一番地
出版人 辻岡文助





よあし かきぬさるのあやめ
夜山阿夜花廻仇夢
号二

永島孟齋画

二編中



へ14
2689
5

夜あふし
おきぬ
お乃
何れ
由免



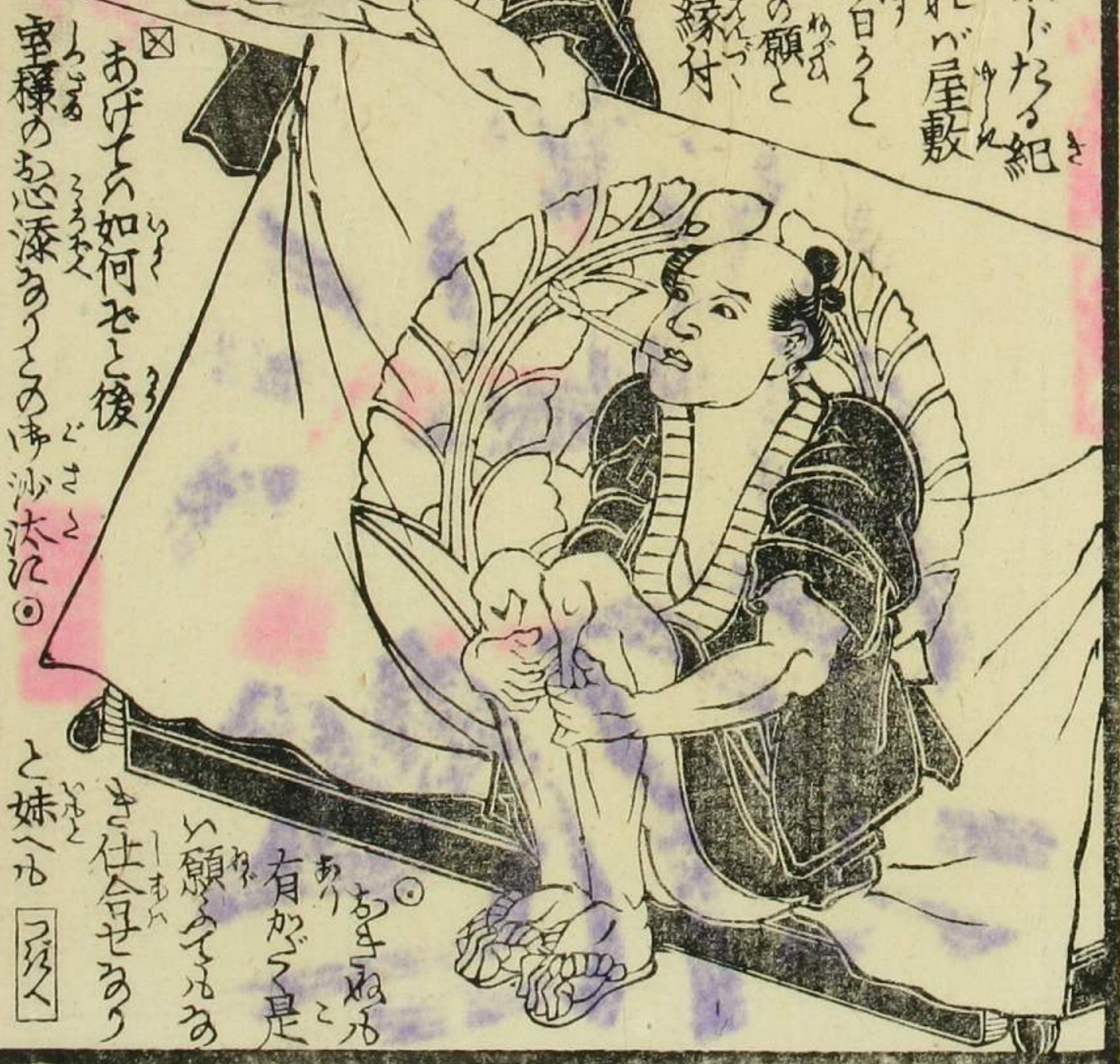
二
編

産松堂様

中純

ま
記

王集
ヨリ去程おきぬ如何と案じたる紀
の國屋方の談へ頓ち整ひければ屋敷
の沙汰を待のみにて今日多明日と
待たせり大窪家も當人の願と
あらば君と沙汰せし通し勝手に縁付
とて苦しうは其跡の後
室様も手當り賜る
とゆゑ時日のむご
申し出よ是は無理に
とらぬいあはれと縁
付先へ妹を伴ひ肩
身も扱ふん幸ひ與てお姓
を召るるればお幸ぞ



あはれ如何と後
室様の心添あつての事沙汰に

ありおきぬ
有かて是
願ひてらる
き仕合せあり
と妹へ心



因^よ其^の由^ゆを語^り早速^{さつそく}か
 受^うて^し其^の身^みを洗^{せん}殿^{でん}に
 あ^り時^{とき}の衣^い服^{ふく}調^{てう}度^どの相^{さう}
 應^おこ^し品^{ひん}を^もち^けあ^けて^ん厄^{やく}
 みる^りお^もた^まを^ま奉^{ほう}公^{こう}に
 差^さ出^い角^{かく}大^{だい}郎^{らう}と
 丸^{まる}打^{うち}合^あ表^{へい}向^むて
 婚^{こん}姻^{いん}と^と取^と結^{むす}ぶ
 吉^{きち}日^{にち}と^と撰^{せん}び^び屋^や敷^{しき}
 へ^へ斯^すと^と申^ま上^あし
 る^る祝^{いわ}儀^ぎと
 して^{して}小^こ袖^{そで}と
 の^の外^{ほか}の^の品^{ひん}

一通^{いつう}の
 手^て紙^しを
 認^{しん}め^めを
 擔^かぎ^ぎ出^いす
 時^{とき}屋^やの^の内^{うち}へ
 態^{たい}と^と落^おち^ちせ
 以^い角^{かく}太^{たい}の^の夫^{つま}が^が証^{しやう}據^よる^ると^と手^て



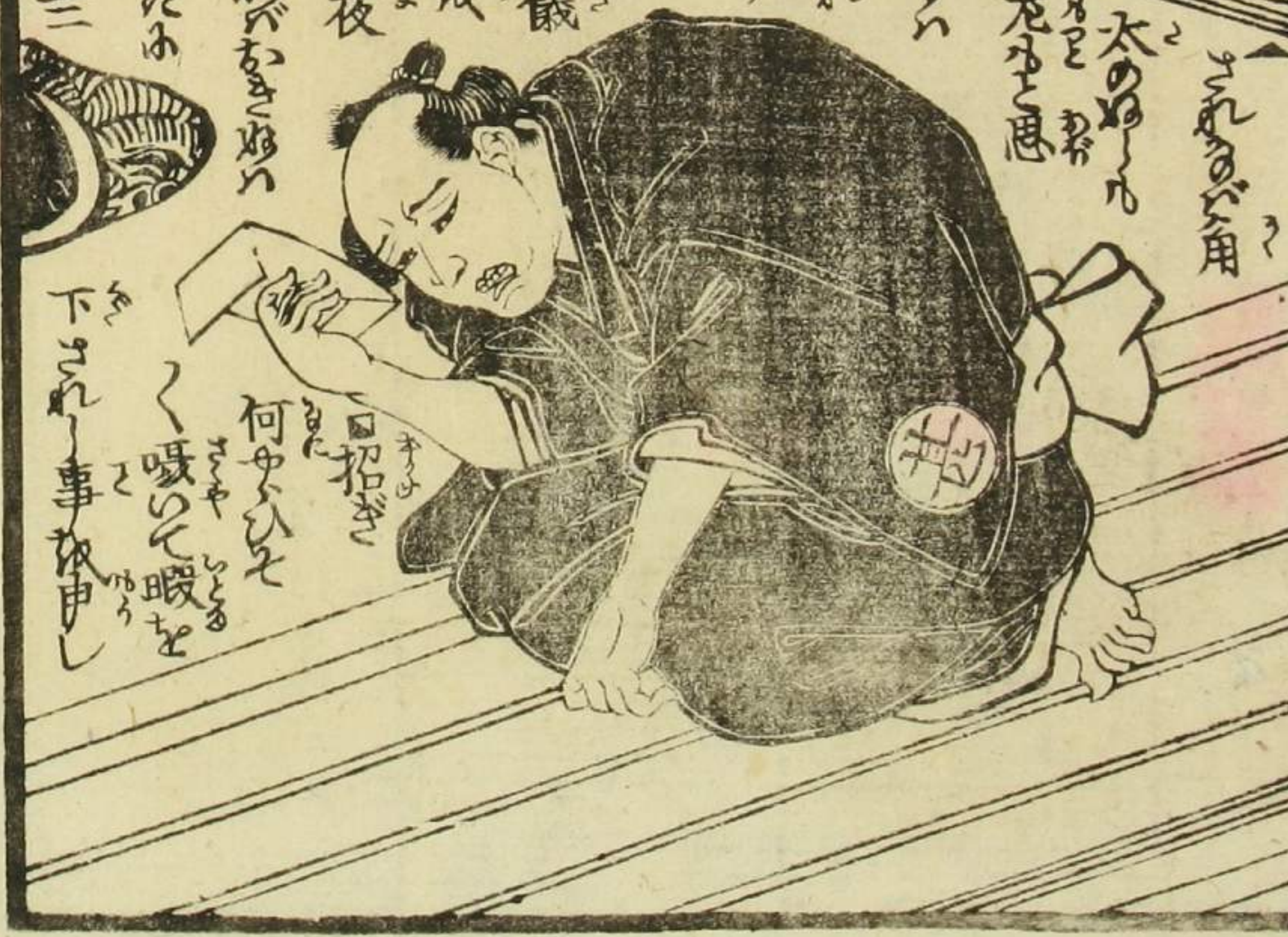
此^{この}後^{のち}の^の屋^や敷^{しき}に^に
 扶^{たす}助^{すけ}せ^しぬ^ぬ其^{その}手^て當^{あた}り^りと^と
 餘^{あま}り^りの^の黄^{わう}金^{こん}

跡^{あと}を^を殊^{こと}に^に怪^{あや}し^しみ^みあ^ある^る事^{こと}の^のれ^れい
 此^{この}後^{のち}角^{かく}太^{たい}と^と夫^{つま}婦^{つま}に^にあ^あり^り二^につ^つの^の寮^{りやう}
 一^{いっ}家^かと^とな^なる^る長^{なが}い^い内^{うち}
 め^めの^の甚^とへ^への^の手^て跡^{あと}が^が目^め
 に^にあ^あれ^れ夫^{つま}の^の事^{こと}を^を
 糺^あら^らせ^せる^る悪^{あく}事^じ
 の^の露^ろ頭^づと^とあ^ある^る
 の^のみ^みあ^ある^るは^は是^{これ}
 まで^{まで}尽^つせ^せ辛^{辛い}
 苦^{くる}も^もあ^あら^らぬ^ぬあり
 小^こや^やせん^{せん}と^と思^{おも}ひ^ひ一^{いっ}
 日^{いち}も^も安^{やす}心^{しん}な^なら^らぬ^ぬあり
 其^{その}折^せの^の男^{おとこ}と^と逃^に亡^{じやう}せ^せ様^{さま}に^にあ^あら^らぬ^ぬありと^とい^い



事の事徳
利の酒を
彼の飲

心を小夜打明首尾
女と頼め小夜の
頭を打振て夫の安き
事を却て人の疑を
招ぐに近き業に
あれ黄金も多く



知
かぢ小夜
の心を知れぬを
免れ角もよめ
計らひて金三



彼れ
悪事成
る世身され白
多し入語り小夜
は近隣と婚
姻する下
部
小の暇を
夜八
と小蔭へ

何
別
度
の
世
話
を
て



其ハハ打悦び夫
 暇どつげて何所とも
 るく出行し
 早氣にかゝる
 雲もそれらる角太郎と婚
 禮の當日竹二郎と番頭の四
 郎吉と始め親類の甲乙嫁人と
 頼江勇次郎も勿論その外出人の
 人々凡そ三四十人の酒宴にて四海波風
 穏うた三々九度の儀式もまみ何れも
 酔町の上思ひくひの藝尽しりとあつそ
 いと賑やま事るじさ餘り紛雜けけ

火くもぬる春もぬる四月初め
 の短き夜もぬる角太郎と番頭の
 夢もぬるを真途の鳥赤い
 血もぬる死
 彼毒
 嘸



多岐の省も斯く是まで三軒とふれ隔
 ての垣を取除き三ツの寮二ツと建家の
 近き所へ渡り持ら互ひあ
 往来と便利なる
 暮は内々
 していと睡ま

怨んで
 わん
 思へ
 何
 物凄
 暗き心
 事考
 へて則ち
 氣味



〇あそのれれと其場は他事に紛らせと成れぬる
 胎の内さるに強氣の女さるる其後の夜々獨りて
 厠さる得ゆる折々妻に八重の名のみお事
 ある不審と角太の思へをなぬら其事故
 少く語り出さぬ何う様子のある事と押
 て向ぬと心は今更も八重の行衛我事恨ん
 で見つり暮あつ折あ
 うれの語り出す
 咄ちあきぬらう
 水打消し
 身もあ
 して厭がる嫉妬さるりの
 様でもさるれ彼の身さる疑うれ何れ心面白



〇此頃
 霖雨と共に間に立籠
 り只鬱々と日を送る暈月の
 空も今日をえれ久あり
 ろる庭の月も昼近
 交る友が三人訪来て誇ら我幸ひ
 と角太の直み
 衣類を着かく打伴立てるがごと
 隅田の堤の風景も所あわそ珍
 〇浅草寺の奥山の花屋敷もど
 あちこちと眺め歩いて正午ごろ
 支度をせんと地内を立ちぞ

〇程遠くぬ馬道の
 の甲子屋との料
 理屋へあがり眺物ので
 きる内表二階の欄干に倚れ往
 来を眺めあれ是と女さるてのち互ひ
 以品評する其好へ通りかつ〇

即日席料理甲子屋

御料理



一人の藝者座敷を急ぐ早足に行過れば残念と
 一人が撲としてどろろ音に藝者へもや知人か此方の二階と
 振り顔を角太へもやのり吃驚「オヤとりのまに藝者の
 またく那方の路地左まかり影をぬぐとておどろこのおれ
 下女の名前をきけいあれ常磐やの小久とりのめて此頃廣小
 路で弘め候とて男嫌ひの評判でしつて客のひねきがある
 とりのの若やと
 角太へ思へど小
 梅へ

顔とけぐ
 と眺めつめ
 て此方の
 りと
 えやう知
 ぬ人仔細知
 振る笑ひに
 約ら其き
 を繕り
 有様
 へい
 ふお八重に
 あふれ
 べ角太



遠く
 小あぬ此土地で
 よんや藝者にあり小あぬの顔容り年頃もや八重にする
 違ひぬ心海かた事ありと心あぬ其色顔に見へて
 友達も早くも悟つて下女お云つけ小久へ口をわけしに宅痛つ
 木も直未たり酒肴と共に座敷へ出て今日といひ
 声ゆゑも八重に似これ角太郎の途にお八重と思ひとみ不対
 ろの女といひぬまうて空つとむてぬ側小久の進んで何を驚き
 ろの女といひぬまうて空つとむてぬ側小久の進んで何を驚き

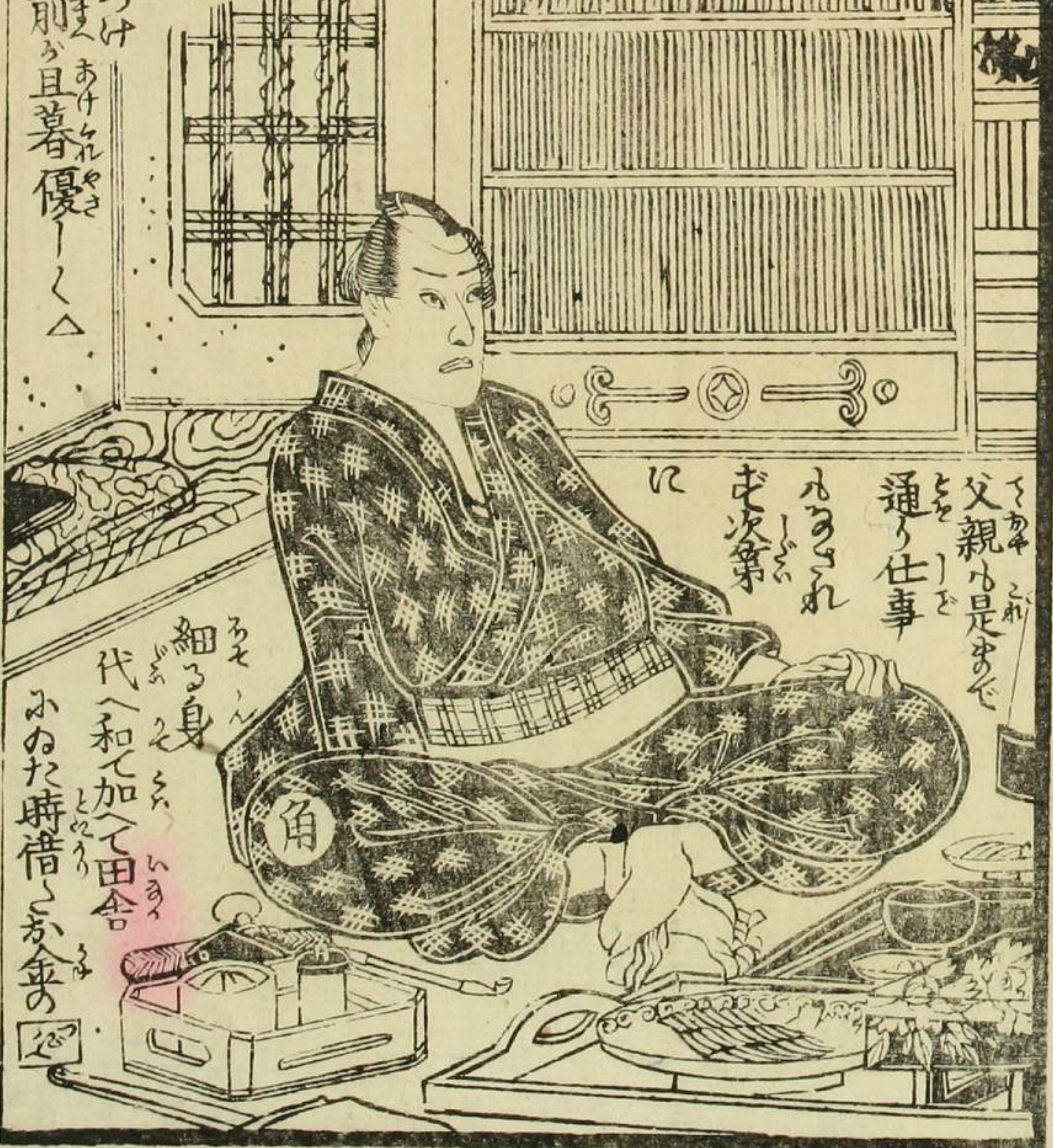
今更間
 が悪
 杯
 とつ
 打笑る
 くの前の顔
 の羨とせつぬ見とれて
 わせたとまふ五ひに打解
 て真成添へる小久の三味
 線唱を端唄の調子とてかハ
 重小似るに不思議と
 人こそ知らぬ心の内角
 太の思ひを焦る

其日別れて立
 帰らば妻のあまね
 けい少くも語らず其
 習習も浅草辺の料理
 屋小久坂招いて世間咄
 しの事故よせ其身の
 素性を尋ねた元ハ
 八王子在の者にして十二
 の時に久の貫られ育て
 られらる母親が長の病
 氣に父親が烟草裁刺む
 営業も藥の代み煎り
 つめ管の細煙をた



世話ごとくあれは
 嬉しけれは
 氣の毒や
 と夫のみ
 苦みして
 去
 年の暮母が
 此世去れ
 後ハカ

へ立る小辛き世の中
 に生て甲斐あるは老
 の身も十八年の其
 昔中山道の深谷み
 て育てあひたる入
 の悴三吉の家出や
 せし十四の時數へて
 見れば今年ハ丁度
 三十二血氣盛人の若者
 られば手元におくス
 まるは苦しい思ひいせは
 きに不孝な奴と思ふにつけ
 貫めて育てた他人のか前且暮優しく△



父親は是れ
 通し仕事
 小次郎
 細身
 代和加て田舎
 みのた時借をか乗

き催促が厳しく
きて父親の病
氣が出る心
配るるを見て
ぬる私の悲しい
人の勸め幸
とか金銭借て田



いづ一通り私の吐く
聞ておれと角太郎は
八重の事を始り委し
く吐く男

但し又身をも授け

と重ハヤカ



ちり

うたをうけ漸々此頃
弘めむと執着の心か
おそひるる少少習ふ
三味線の其執事
ふくかたつ不仕合の
身もの
あはれ
と思へし
と涙あふた物語の品を厚く角太
も共々鼻打らみ聞かすくはと怒然
る拙外み障るあぬとあはれ及は
あはれはあはれ進せり
次第のいふ自惚ら

生死へ更に多うねと
始めにお前めあふと
時

一途に
顔容
うろ跡まで
お重の
く怪しむるを
思ひも他
人の空
似とい
ふ事
あはれ
お前
様
の

石屋二合

以てあるの實に不慮儀

暮い豆

以て打明て深か

中とあま

厚き惠受る

て別の人が少しも思ひ
ぬ私の心も推察して他
人と思ふてさき

るなと優

詞の色

みせて

其後志のく通

ひ来る角太の

情にわたされ

て男嫌ひの時

れらる小文八類

うみ角太成



甚

会ひければ幸ひ

ある事と座うは八重み

養父が且昔に行儀を尋ねる三吉

無事なる様二月の未だ観音

様へ毎夜かゝる跪詣りの席と

勿体なけれ何平の不實なる重た

中心願ひは行く見んと親ため

一夜かゝる浅草寺の観音跪詣り



的

朝鮮

大包代二十五封

官許 牛肉丸

名法

中包代十二封五厘
小包代五封三厘五毛

たんせいごの茶

官許 天恭丸

錫入一色代五封二厘五毛

此茶は男女、老若、小児、病後、酒後、
一切の病に、最も、効果あり、
且、心願、ひ、行く、見、んと、親、ため、
一夜、か、ゝ、る、浅、草、寺、の、観、音、跪、詣、り、
勿、体、な、け、れ、何、平、不、實、な、る、重、た、
様、へ、毎、夜、か、ゝ、る、跪、詣、り、の、席、と、
無、事、な、る、様、二、月、の、未、だ、観、音、
養、父、が、且、昔、に、行、儀、を、尋、ね、る、三、吉、
會、ひ、け、れ、ば、幸、ひ、
あ、る、事、と、座、う、は、八、重、み、
あ、ひ、く、思、へ、ど、何、才、に、お、
つ、け、何、の、存、細、り、
言、せ、不、實、
身、に、生、馬、と、い、ふ、八、重、が、男、と、逃、
こ、る、に、
聞、に、
あ、ひ、く、思、へ、ど、何、才、に、お、

出版御届明治十二年六月十八日第大區一小區深川富岡門前町六十五番地

編輯人 岡本勲造
等天區一小區横山町三十一番地
出版人 辻岡文助

文 地本 錦繪 問屋





岡本勘造綴

三船下

14
2689
6

夜

嵐

阿鬼

奴

花

延

仇

夢

岡本
勘造
綴

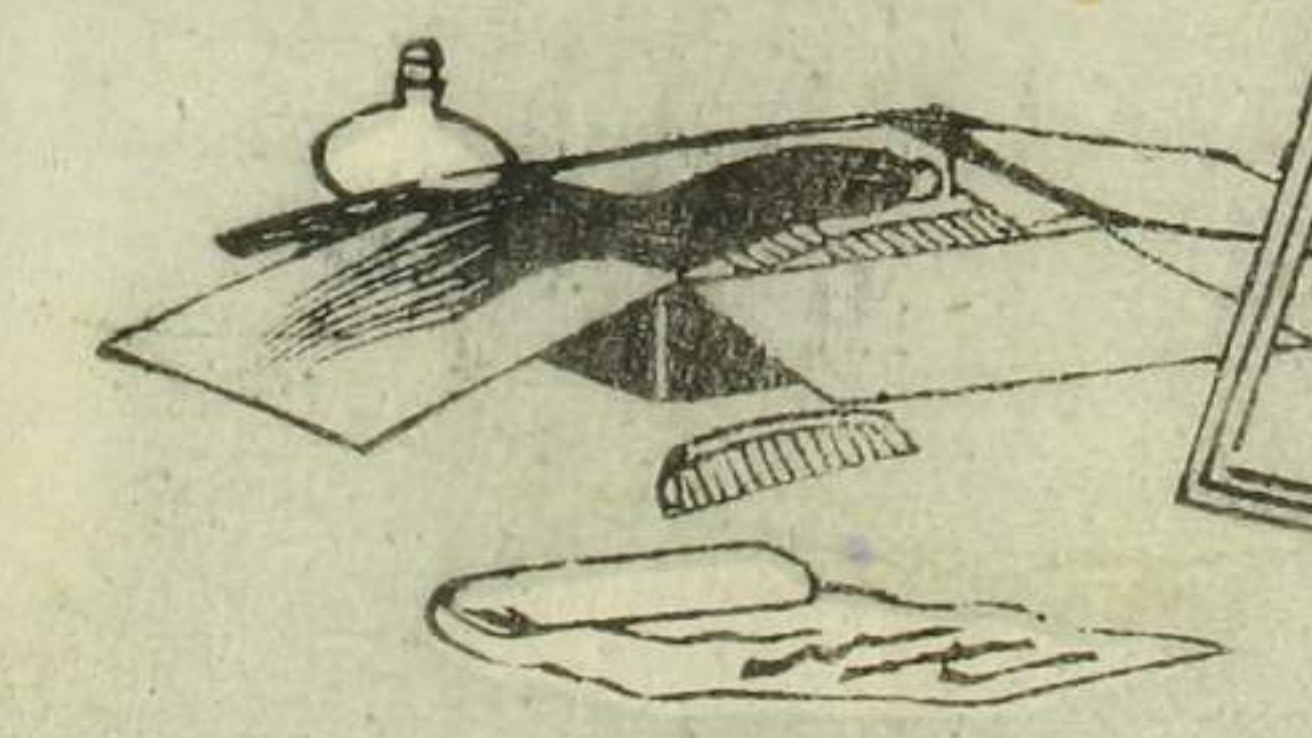
金栢堂寿梓

二編

下之
卷



孟齋畫



芳川
俊雄
園



○宿るべき技と
離し羽拔身

これと所へ定めねど

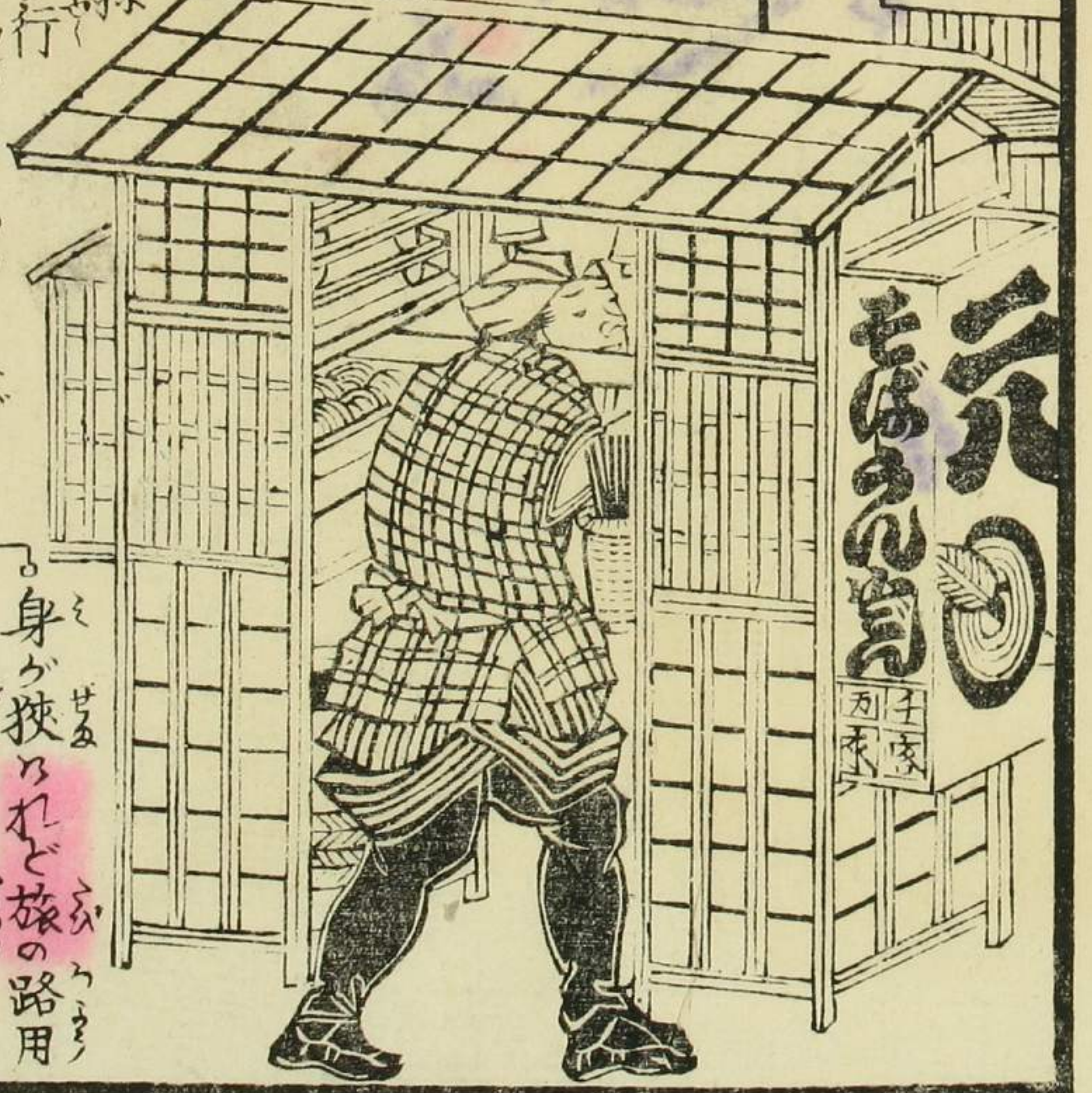
貫以金のあまふまふ
昨日千住今日吉原小店の
遊びの敏おくと遺ひ尽せぬ金

高もよきと夫と取戻し遠く
ふひく保養とせん吉原田甫

の六郷の大部屋へ入り込んる
甚か催ふ博奕の大賭場

で足を出入り引ひく六は様
も尽果て呆然と立出く行

べきものあつく悪事の報は怖くと思へ江戸あへ



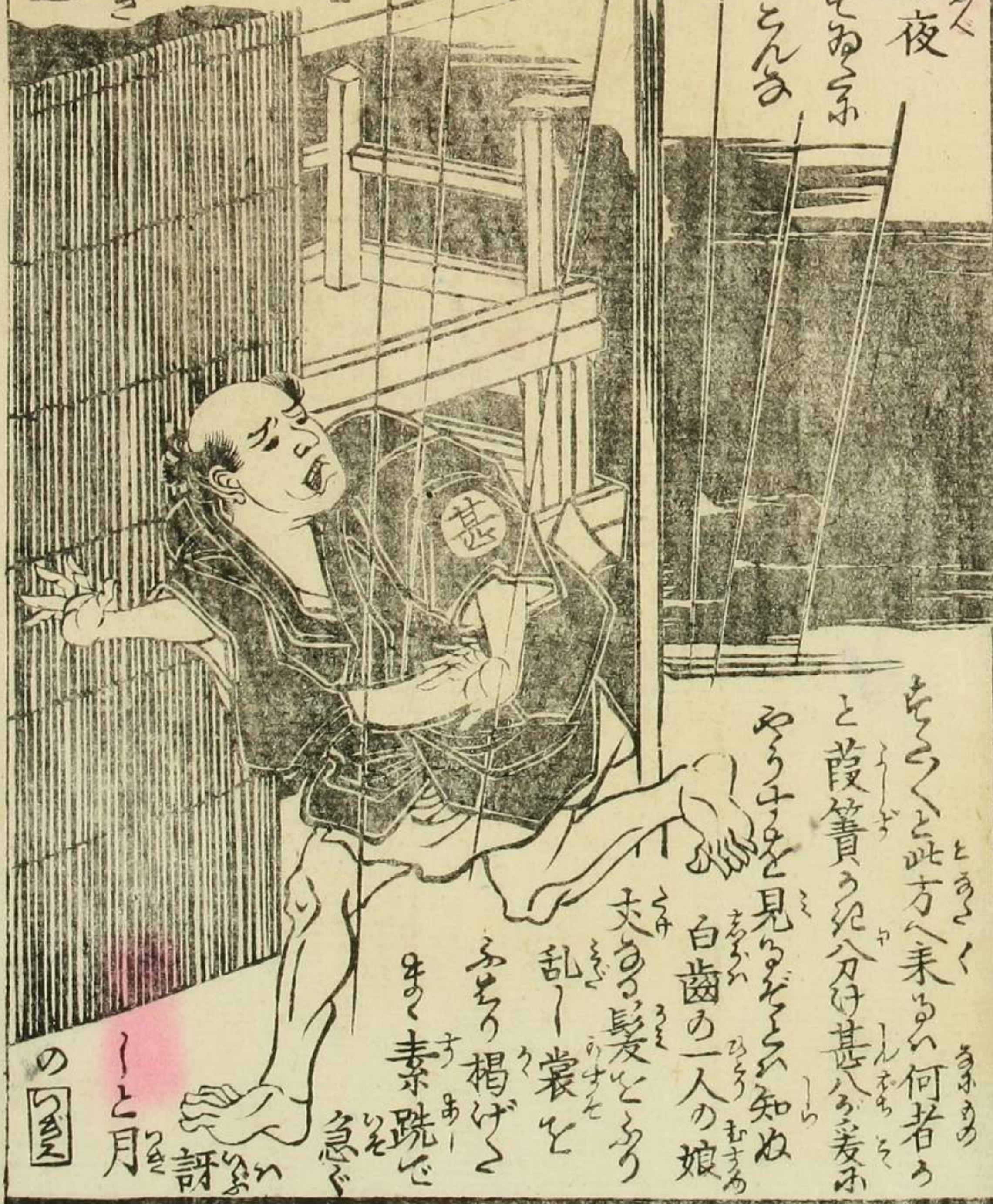
身が狭れど旅の路用
も月の夜便と吸へ

是より行て泣つる
 一分や二分の草鞋
 銭のいあつらん
 更行空を眺つ
 往來たえさる
 浅草の雷
 神門「來かる
 時俄小空が
 撥曇り月と隠
 きて風さく起り
 物凄くホツくと
 雨の少く降



積上てある床几を下し二つ並べ
 其上へ寝摺びが眠れぬまの色々
 返らぬ妻と考へて心細さ今更
 悔むの詮なき妻うら欲に暗ん
 一時の誤り人せあめめ手
 ふ入と多くの金
 一文の此身お着ぬ
 今日の仕事もせぬ
 悪事のせぬと
 胸の曇りと諸
 共小月と隠せ
 村雲のよき晴たる薄明り雨
 間たどる人足の此真夜半に

出さるよイ昨夜
 傘と持てあふ
 間の悪い時とんま
 のの
 四辺
 見廻
 辻講釈
 出てあつる
 葎簀小屋を
 見付て是
 妙ごと束け
 ある葎簀買き
 分けの



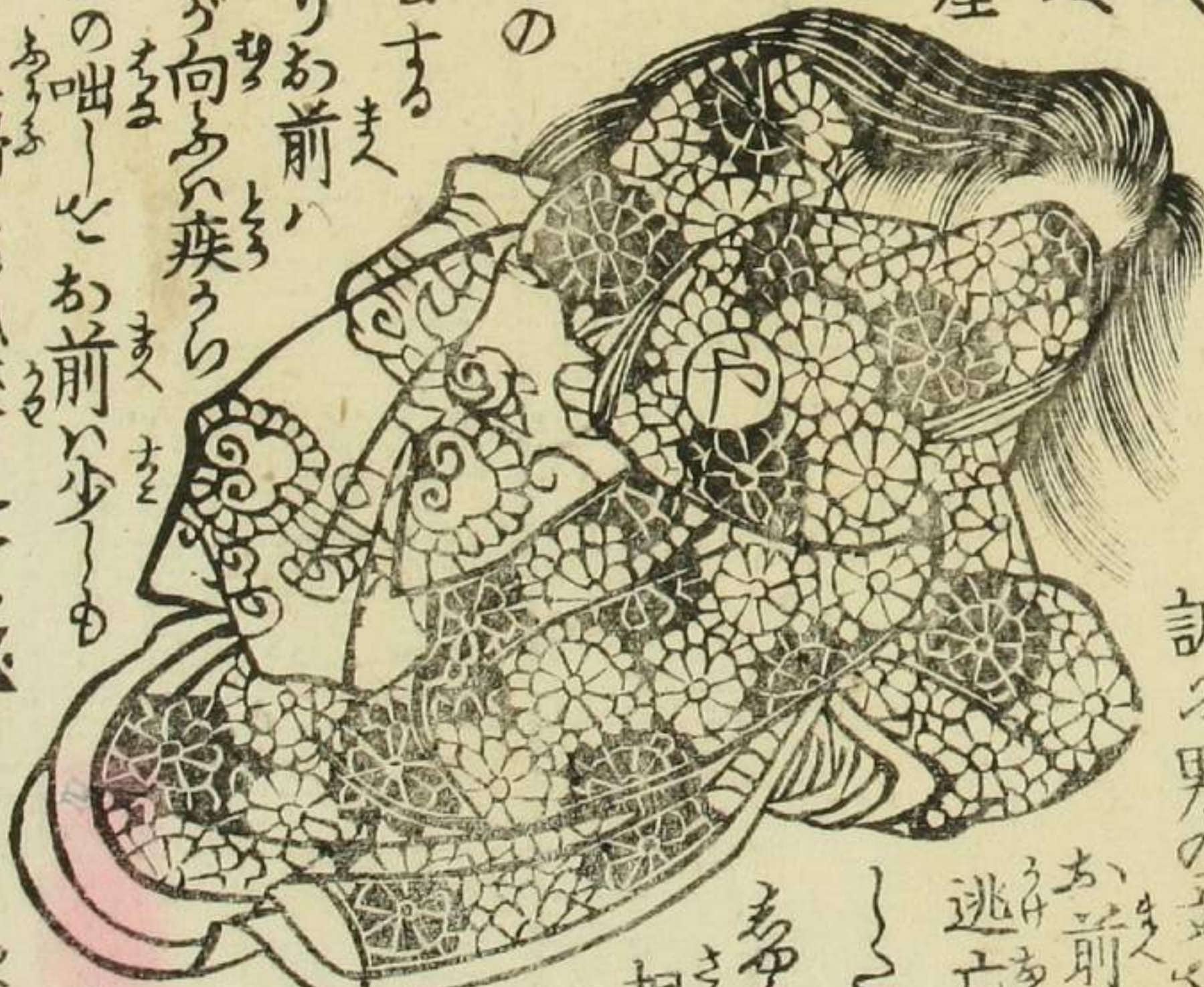
とらくと此方へ来る何者
 と葎簀う記分け甚か羨
 ろうしを見らるる知ぬ
 白齒の一人の娘
 夫ある髪とあり
 乱し裳を
 ふちり掲げ
 まの素跣
 急ぐ
 と月

光りなき夜に見れば是の如何の縁ふ方お八重の面影
 されば弱きふ付込で怨ととたしに來りし
 南無阿彌陀佛と甚八が段簀
 と撲とかた合せ息を殺して
 止らぬらふ女の方へ
 行過て妻もあらず
 ホツと一息つくと
 と考へるに足を
 踏みしるる幽霊
 にはいよもゆきされど
 お八重小達ひのけふ那時誰ふ救はて
 無事で此世ある事う左様しとては近々



今更お前と突
 出す訊ふらば
 種々支とて
 揚勺業種屋の
 且那をい
 者より余やと自
 由にモル子と
 麻酔劑を酒へ
 混てお前飲せ
 夢中あつて
 その所を甚八
 に擔ぎ出させ
 隅田川とて

かきぬの悪事も露顯小及べば玄達とりた
 此身まで連累うあれ知てある是や
 勘弁とせめあなうぬと元の床几へ
 足踏の夜風と田舎葎小屋
 あれ報ひふあ坂へ旅立一夜の
 假枕とて夢を結ひる
 ○色と慾との二筋道を先へるう
 隅田の蝶と近所で凌ふ長唄も其身の
 変らあはせしけれコウ強情も大槩よする
 りんご此同くろせすくくつ通るお前
 角太郎一美理と立る積りだらうが向ふ疾うら
 秋の空涼しくあつて捨らるるあいの叫びお前少し
 知まが隣のおきぬの欺されて未の夫婦といひ交して



やらは傍のめいひ
 訊く男の文と拵て
 逃亡でも
 相談と
 密と
 立聞
 時直
 お前

つぎ 知さうと思つたら角太郎は惚きまうてぬる
 お前だつら中々真事とありあけし去てお捨て
 おくとお前の身の上づつじつづつ此鼻も疾う
 思ひをわけきざれ爰と一番ふんちるあや
 心のたけ竿短りも長いもはにらら
 今こそ瀬をかくて大御馳走の場所へも
 出せ宵のうらうら小舟をかりて
 隅田のつゝその柳陰をま
 こそこそ汐待の所も丁度
 長命寺お前の命の助る
 瑞相堤の上うら甚ハク無惨や
 こ此仇者と惜氣もなり
 川中へ打き込ぐと幸ひ舟と漕と



☒二生のそごを撒の
 い物おろね
 最り加減のウンといひ
 ささ
 あら
 まいも
 程が
 あら
 のご
 ざら
 コレ
 やへ
 大重
 あら

救ひあげ橋場の宅へ脊負て来て兼る
 毒を吐してまき以補ひぶりのな當として
 死るあやあぬお前の命を扶けよりの
 橋場に居ちや小梅へ直知る
 必定こじたのと思ふ所骨
 折賃イヤサ骨折が水の泡と
 なるていつまらねく
 此牛込へ引越たのも皆な
 お前のためと思つてた美理
 人情を知り日あやまんざら憎い女達でも
 あるめいの命の親そと恩ふかけのあや
 ねが顔いさしうても鬼の様な心の角太郎と面へ燦磨
 でも仏のやうな心意気の女達さんと乗かてりませ



あぢに
 りう
 調合
 己が
 事と
 包紙
 薬袋
 みた横
 まる匙
 舌の先
 持とを怖
 始終に俯
 泣

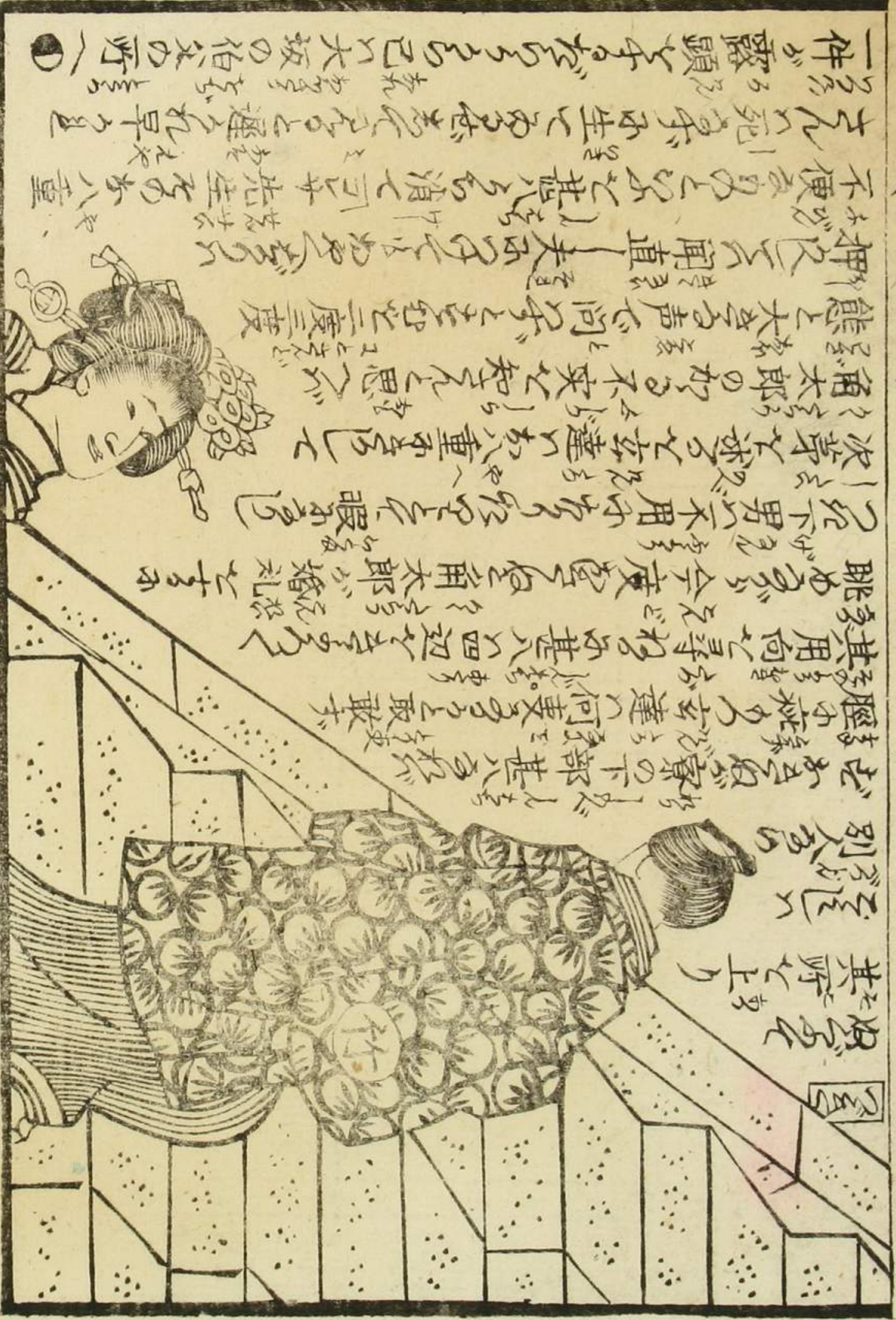


居たりが此時漸々顔とあが貴郎が救ひます
 其御信切へ今更仰るるるる
 存じてやりますれば
 外へ便りありのり
 たと先のおとこの
 替つてあると此間も
 申し通りお腹の
 兒も三月胤
 先で宿し上り
 又殺されるまは今一度
 角太郎さんにお目より
 申し貴郎のお心に従ひます
 猶此上の御慈悲おぼろび

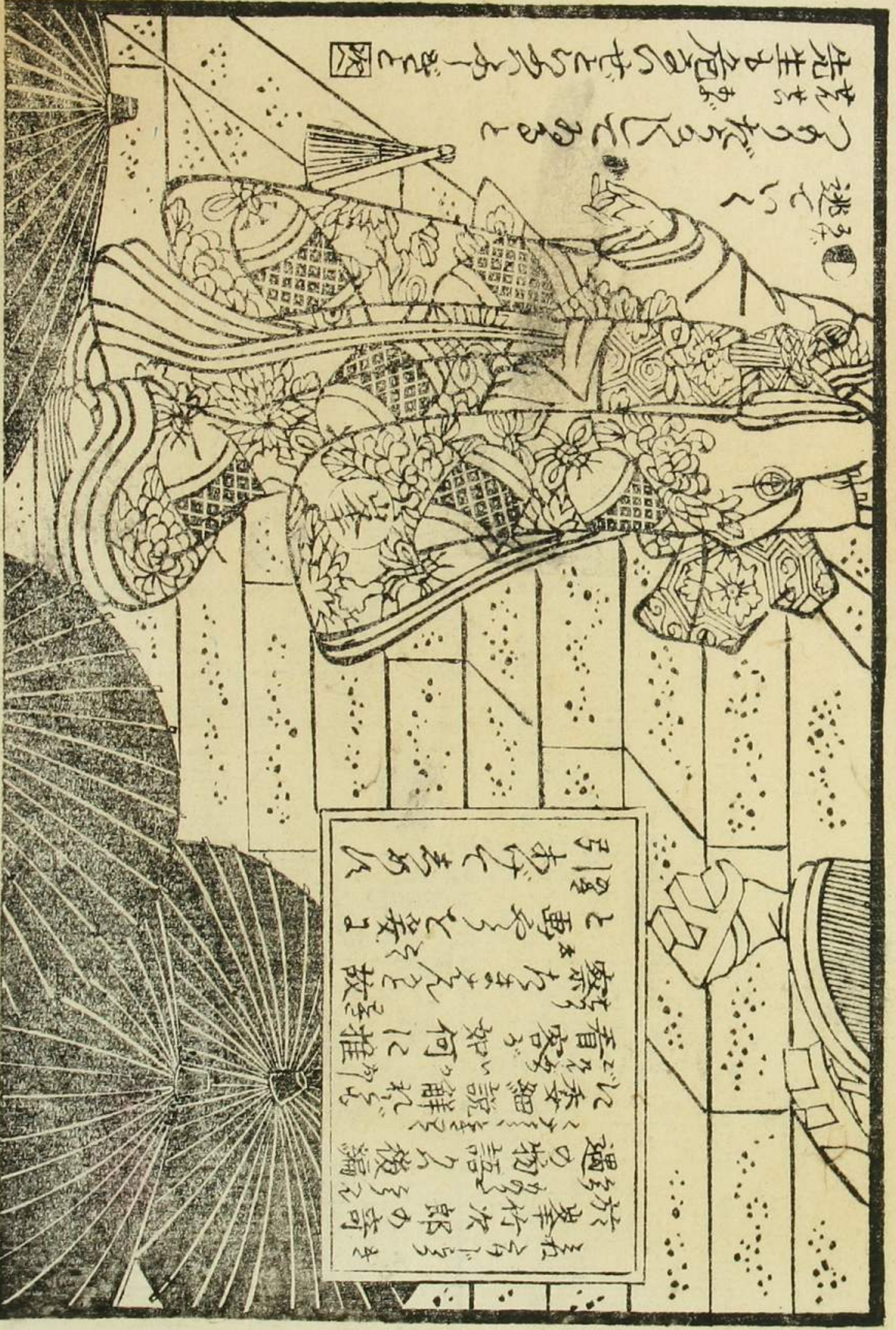


内證で貴郎の
 角太郎さんと愛へ
 呼んで下さるは何と
 仰るるるも夫まの
 アイと返事が出来ま
 せんお免しなされて下
 されといふもさう
 玄達が

折ぬ堅固な操
 暫く呆れてある折
 小打驚き慌てお八重と引立て元のさ
 威しと賺し口説
 有繋の玄達お果
 誰やら表小案内と
 押込お羽織引
 表の障子と押明
 やとの更で知
 穢く御免ませと
 穢く足と手ぬぐひ



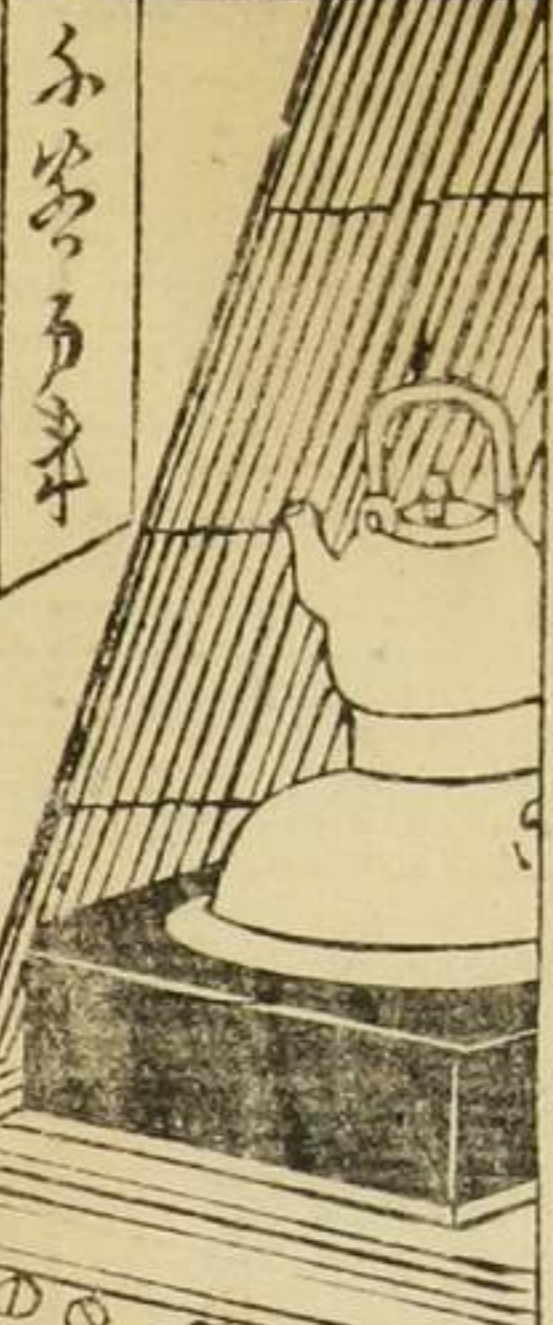
一件が露頭と申すは己の太坂の伯父の所へ
 せん死す申生てゑせとて遅く早くと
 不便なものと云ふ甚はる消て可申先生なるか八重
 押込て聞直し夫由子てはかど
 態と大きな声て問ふと云は三度三度
 角太郎のかる不來之知んと思へ
 次第と云ふと女達ハ八重をさして
 足下男ハ不用小方て足下之暇も
 眺め多々今度とて角太郎ハ婚禮と云ふ
 其用向て尋ねぬ甚ハ四辺と云ふ
 腰小紐ハ何妻のりと取取未
 此女はぬ察の下部甚ハ高松
 別人の
 其許へ上り



先生も危ないせしめ申す
 逃げい

於奉竹次郎の奇
 遇の物語を後編
 に委細説解
 看客如何に推察
 したまはんと故
 と申すと安
 引お付を志ぬ

ふあつちり合



ふあつちり合

内うちで此事このことと聞きくと憚おどろるともあつて
胸むねの浮うんと甚し八はちが急いそぶ企いころ一いち玉たま夫つま

先生せんせいより那あの一件いつけんのいひまのが

久ひさしの間まがううととてあつて

ので少すくしとらうあつて金かねも

残のこり取とらねてあまつて立たつ

出来できねへううり上あ方かた行ゆつと思おもひ立たて



合あひの鼻はな紙かみ

代たのつり

だぜ

路用ろよう

ちち仕し方かたが

ねへ

ねへ

友とも達だちを歩あひて草くさ鞋せ銭せんの勤ごん化けとと思おもふ半はん分ぶん

も集あわねへううり據よこころはは出いで来きて来きあもあつて

向むかひ行い着きまを路用ろようと用達ようだちで賞あふと思おもつてさ

先生せんせいどどうも助すけけて下くだせんう路用ろようと云いつて出来でき

あつて餞別せんべつと上あつと甚し八はちと早はやく追返お返しななさ

一分銀いちぶぎんと四よツ紙かみのせと差出さすと甚し八はちの横目よこめで

んて耳みみアあか志こころだかひで記しすすめ十じ里りと干かん

里りの所ところあつて二に両りょうや二に両りょうの木賃宿きぢんしゆくへ

泊とどねへううり煙草えんそうの箱はこじ空くうをむのておへ

様子ようすへ何なにう一いち物ぶつの胸むねありと思おもへ共弱きじやくと

ん世よと玄達げんたつが小膝こひざとすめ甚し八はちとん

お前まへは是こゝが不足ふそくとどののうア上あ方かたへ

路用ろようの不足ふそくと何なにも路用ろようとつて上あつてさ

路用ろようの不足ふそくと何なにも路用ろようとつて上あつてさ

路用ろようの不足ふそくと何なにも路用ろようとつて上あつてさ

路用ろようの不足ふそくと何なにも路用ろようとつて上あつてさ

路用ろようの不足ふそくと何なにも路用ろようとつて上あつてさ

×ぐく

あてぬく

喰くひ込こまり寧ねその変へ此こ方かたの名な

乗のり出いりやア少すくしハ罪つみが軽かくぬら

先生せんせいのいひの毒どくを認まつる自業自じごふじ

得えてあつて毒どくオおとと甚し八はちとん又またも

お前まへがもつて違ちがへあるぬ夫おとこのさうだ

困こうゆ云いてもいふと二にヤやふららわりの

妻つまき那あの時ときお前まへの高たかい茶ちやとつて五ご両りょう

礼れいと取とらう其そのの茶ちやが尿せの役やくもい

お重おむねがびんくあてある所ところをいひ何なにと飲のんで

の知しらぬあねへ一いち体たいあれ何なにと毒どく茶ちやへ

毒どく茶ちや変へつて薬やくとるに因よ術じゆつの因よ

妙所草根何ぞ大鵬の志一と知んと仲景先生が説れど
 其場を紛ら眉をひそめて立上り舌をふる百味だんすの
 引出ら金子五両と取出て甚八どん私困る処どう
 是はけら出来おつら我慢あると前の両と
 一所はして差出たぬ甚八急小坐を直
 先生是で心氣の毒オツ毒の字の禁物
 ぞ淋ねられど今この通りだつら少の
 間貸て下せ大坂へ行着アエ面にて直小
 送つてまじやう今日少ゆも出ておつらと思ひ早
 速多お暇とあせせると礼はて立上るを
 こゝに留ても心ゆ早く帰れとせれ
 悪妻の強き玄達も八重の悪破
 まんと思ふ心の弱き取らぬ



義知とせられ
 腹小土産のあつこ
 を隠してあつて
 支度の金とあつ
 ありせめて野
 野とられ山
 里に身
 と隠

甚八金六兩を街られてどかりあつら
 のどどど若や八重甚八の咄
 せまへつとやうと探おに何おも
 知ぬそつらゆ先安んせ
 のの口説小落ぬ強情小今の色気と
 打まてと怒ととらんとれ共娼妓小
 高買とのあつこ中々承知あつら
 何なる夫のあつらととあわ
 んの中へ聞込
 此頃赤坂の
 松井の邸で
 妾と一人さ
 すまのり



其玉次第で支度の
 金望まふ任どとら
 工故番夫へあつ
 せうとあへと欺
 獨り笑つ早速
 小松井の邸へ
 蔓と求めエの様
 子を揺りし小樽以
 達り於十七八の別品
 めを従順ゆあ妾
 と急の心探索さ
 とのめああかつら
 うつてつけし運が
 直つてと

夫の如く八重種々と辞と飾つて松井の郎へ妻の上を勸めし始めの若くはせがら何れか
 多く打笑し貴郎の爲とあるら命と救めて下さる。お礼の意の脊をまきぬるは計ひ玉の
 柱存外、身く諾ふこのあがじと去達直子夫々打合せの郎の一日早くめええの上との
 急るれは又も心多のうらぬ内と依り支度取りを衣類の一時指料でま合せんが
 三月餘りつらねあひく多の髪とあげさんと雇婆や小言上り
 髪結を探しに走り自今隣り鏡をみるや外で借る
 多の支度とせる処婆が二所は伴戻り女髪結を去達秘の
 妹で久しの間病氣でなと女定めて髪もつておんが
 明日は殿伴でるのめどくお前とおぼしあつて
 品は高島田の結て下さの奥のまふて
 ころうらあてあるとのよは任と髪結があするあ
 明て内小入るりの鏡と写るておんあつて
 振返るる其顔とる髪結はつて
 互ひ小是と顔と合せ遠くをわらう



橋島郷編輯

銅版開化玉編全

島田豊三郎編
開化女用文章全

漆寄延房編輯

近世紀聞

初編より
九編迄出版
以下追々発売

田島象二編輯
高田業
小学
取引要文全

漆寄延房編輯

義烈回天百首全

魯文作
國貞画
金花七変化

鮮齋永濯画

新撰 西野古海編輯
東京全圖全

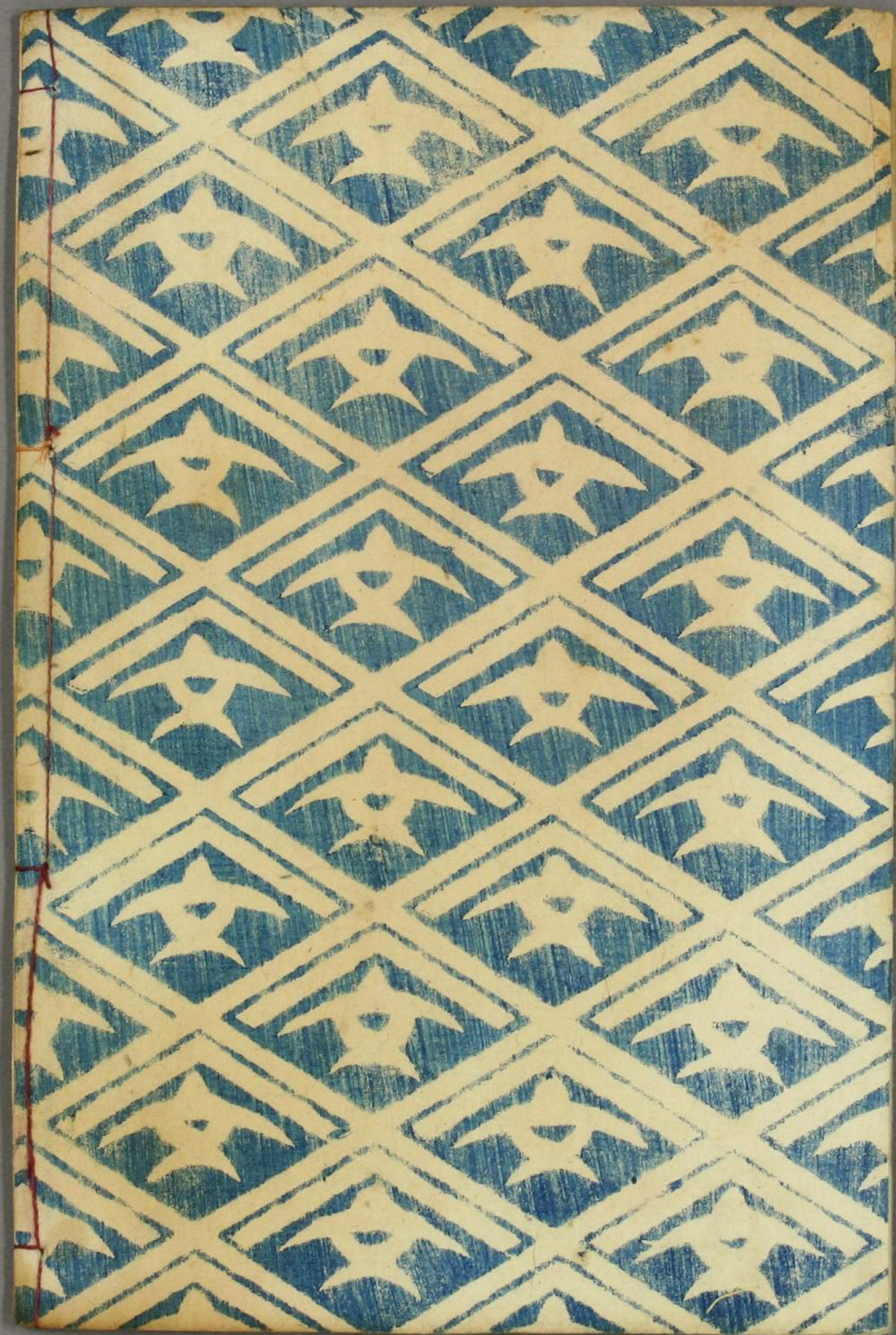
秀賀作
國貞画
濡衣女鳴神

交

地本
錦繪問屋

編輯人 岡本勤造
出版人 辻岡文助
第天阜十三小田横山町三丁目二番地

出版御届明治十五年六月十八日 第六大區二小區深川富岡門前所六十番地



夜嵐

阿

鬼

奴

花

廼

仇

夢

芳川俊雄閱

岡本勘造綴

貳号

金松堂

永島孟齋画

壽

粹



14
2689
4-6